

特別支援学校(聴覚障害) 幼稚部の指導場面における手指の活用に関する研究

—教員による聴覚口話を基盤とした手指の使用意図—

○井口 亜希子
(筑波大学人間総合科学研究科)

原島 恒夫
(筑波大学人間系)

田原 敬
(茨城大学教育学部)

堅田 明義
(中部学院大学)

KEY WORDS: 聴覚障害 手指 幼稚部

1. 目的

現在、特別支援学校(聴覚障害) 幼稚部では、聴覚口話をはじめ、キューサイン、指文字、手話、身振り等(以下、手指)が用いられており、日本語獲得の問題とも関わる幼児期にどのようにして手指を用いるかが課題となっている(我妻, 2006; 井口・原島・田原, 2014)。これまで、教員による幼児に対する手指の使用特徴が調査されてきているものの、量的に整理するに留まっている(都築, 2005; 他)。上述の課題を検討するためには、教員が何を意図して手指を用いたのかも考慮して分析する必要があると考えられる。そこで、筆者らは、まず幼稚部の指導場面における教員の発話を分析し、教員が幼児に対して音声とともに手指をどのように用いているかについて量的に整理した(井口・原島・田原・堅田, 2016)。本研究では、録画した指導場面の映像をもとに、各場面において教員が手指を用いた意図を聴取し、手指を用いる意図について分析し、それらの結果から、聴覚口話を基盤とした際の手指の使用特徴および教員の意図と手指使用方法の関係を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

1) 協力者 国公立特別支援学校(聴覚障害) 5校の幼稚部を担当する教員 12名であり、複式学級担当 J は分析対象から除外した(Table 1)。協力者はすべて聴者であった。

2) 調査時期 2015年7月~10月

3) 研究の手続き ①指導場面の録画: 各協力者の担当学級にて、協力者と幼児が椅子に座ってやり取りをする活動(例: 朝の会)を選び、30分程度ビデオカメラに収録した。②半構造化面接: 録画した指導場面の映像をモニタに提示しながら、各場面で「手指を用いた意図」について聴取した。発話内容はレコーダに録音した。所要時間は1人60分程度であった。なお、本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の審査・承認を得て実施した。

4) 分析手順 録音した発話データから逐語録を作成した。次に、各手指の用い方やその意図を分析の対象として、協力者の逐語録から対応する発話を抽出し、コードとして用いた。そして、抽出されたコードをキューサイン、指文字、手話、身振りに関するコードに分け、内容の親近するコードを検討し、小グループに分類した。さらに、小グループの類似性を検討し、中カテゴリにまとめた。最後に全手指に共通した用い方やその意図、それらの関係性を分析するため、各手指の全中カテゴリを概観し、その類似性を検討して大カテゴリに分類した。以下、大カテゴリを《 》に示す。上述の作業は筆者と聴覚障児教育を専門とする大学教員1名および大学院生1名の計3名の協議によって、決定した。

3. 結果と考察

各手指の使用状況と使用意図について分析した結果、キューサインは48コードが抽出され、18の小グループに分類され、7つのカテゴリにまとめられた。指文字は70コードが抽出され、18の小グループに分類され6つの中カテゴリにまとめられた。手話は31コードが抽出され、10の小グループに分類され、4つの中カテゴリにまとめられた。身振りは32コードが抽出され、9の小グループに分類され、5つの中カテゴリにまとめられた。そして、これらの中カテゴリの類似性を検討し、《日本語の言葉として定着させる意図》、

《言葉の意味や話題の内容をイメージさせる意図》、《子どもの発話を引き出す意図》、《段階に応じた手指等の選択と提示》の計4つの大カテゴリに分類された。

各大カテゴリの関係性を Fig. 1 に示した。まず、キューサインおよび指文字は、その特徴から《日本語の言葉として定着させる意図》で用いられていた。具体的には、①言葉の綴りを意識させること、②助詞や活用形を意識させること、③指文字では、手話と日本語をつなげることが意図されており、これらは、先行研究で挙げられた手話をどのように日本語に結び付けていくかという課題(我妻, 2006; 他)に対する一つの解決策であると考えられた。次に、手話および身振りは、その特徴から、《言葉の意味や話題の内容をイメージさせる意図》で用いられていた。具体的には、①言葉のイメージを促すこと、②手話単語や身振りを用いて、言葉や話題を想起させることが意図されていた。また、それぞれの手指が《子どもの発話を引き出す意図》で用いられていた。具体的には、①子どもの自発的な発話を引き出すこと、②子どもの発話を確かめることが意図されていた。さらに、《段階に応じた手指の選択と提示》が抽出されたことから、子どもの発達段階などに応じ、使用する手指が選択され、さらに選択された手指を提示する割合や提示する語を意識的に変化させていることが示唆された。

Table 1 分析対象となった協力者

協力者	性別	年齢	所属校	教員歴(年) (ろう学校)	協力者の使用モード				担当学級
					キュー	指文字	手話	身振り	
A	女	50代	a	9 [3]	○		○	○	年長
B	女	20代	a	3 [3]	○		○	○	年長
C	男	30代	b	10 [8]			○	○	年少
D	女	40代	b	18 [15]				○	年中
E	女	40代	b	18 [10]				○	年長
F	女	40代	c	20 [6]	○	○	○	○	年少
G	女	30代	c	13 [13]		○	○	○	年中
H	女	30代	c	12 [12]		○	○	○	年長
I	女	30代	d	14 [4]	○	○	○	○	年少
K	女	40代	d	22 [4]	○	○	○	○	年長
L	女	40代	e	18 [4]	○	○	○	○	年長

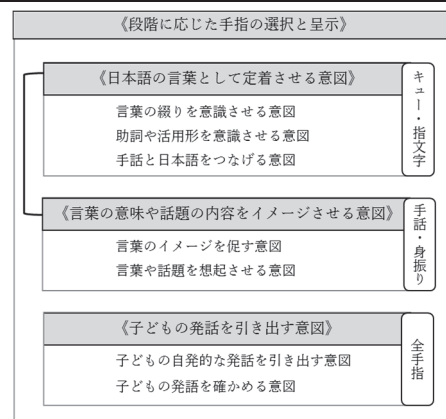


Fig. 1 手指の使用状況と使用意図に関する大カテゴリの関係図

【文献】井口亜希子・原島恒夫・田原敬・堅田明義(2016) 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部の指導場面における手指の活用に関する研究—教員による聴覚口話を基盤とした手指の提示—. 日本特殊教育学会 第54回発表論文集.

(IGUCHI Akiko, HARASHIMA Tsuneo, TABARU Kei, KATADA Akiyoshi)